

コラム



小さな成功は

以前にも紹介したかも知れないが、心理カウンセラーの中山和義氏という方が著書の中で「夢が人生をうらぎるのではなくて、人が夢をうらぎるのだと思います」ということを述べている。その本を読み返す度になるほどなあ…とと思っている。中山氏は主にスポーツ分野のカウンセラーであるので、社会問題の分野に直接関係があるわけではないのだが、それでも「夢が人生をうらぎるのではなくて、人が夢をうらぎるのだと思います」という指摘は的を射ているなあと感じる。

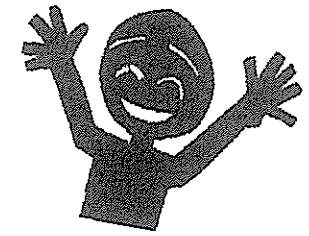
最近の社会状況を振り返って見ても、会社が赤字だから賃金カットも仕方がない、国が赤字だから増税も仕方が無い、敵が攻めてきたらどうする、秘密が漏れたらどうする…であり、労働組合も組合離れだから仕方がない、組合費が入らないから仕方がない…であり、仕方がないの一言で、悪法がどんどんつくられ、平和憲法の骨格もどんどん引き抜かれてきている。まさに人が平和の夢を裏切っている真っ最中といったところだ。日本の歴史も長いのであろうが、こんなみっともない時代は、後世になれば、珍しいと言われるに違いないと思わずにはいられないところだ。

ところで、先日、救命技能講習を筆者は受

けたところなのだが、その時に一つ驚いたというか発見したことがあった。それは、中高年層の受講者が筆者以外はゼロだったということだ。40人近くの一般受講者がいたわけであるのだが、大多数を占めていたのは20歳から30歳ほどの若い女性であり、明らかに受講者に偏りがあることが見て取れたのだ。高齢化社会の日本で、高齢者・中高年の身の周りほど救命措置が必要なはずなのだが、現実には、救命対象の当事者群に近づくほど、関心は芳しくないようなのだ。「命が大事」と言う言葉があちこちで使われているが、その割にはどうなのであろうか？という印象が強く残ってしまった。命に直接関わる話しは、どうやら若い年齢層の方が積極的の様だ。

今の時代、街を歩けば人がバタバタと倒れる状況にある。これは、決して大袈裟な話ではない。筆者の目の前で、この1年ほどの間に実際にあった事だけでも、電車への飛び込みが1人、電車の中で倒れた人が1人、倒れて階段から転げ落ちてきた人が2人、路上で倒れた人は5～6人もいた。その他、電車内で怒鳴りまくって歩く人、辺り構わず蹴り続ける人、延々と独り言を続ける人…と数え切れないほどいる。筆者の目の前だけでこうし

侮れない



社 海樹

た有様であるのだから、社会全般では大変な数に上っていると想像できる。世の中、壊れてしまったか？という印象も拭いきれない。

こうした状況下にあって、各種窓口や行政等は何をしているのか？と思いきや、予算縮小、人員削減の流れのなかで中々腰が重い様子だ。確かに、〇〇窓口を開設しました等の形式的な面だけはあるようだが、実際には担当がいなくて、常勤ではない、担当がいても1人か2人で手が回らない…であり、現実的には一部を除いては機能しているとは言い難い様子だ。駅などで人が倒れても、駅員を捜す方が至難の業というものだ。助けなければならぬ命は蔓延状態だというのに…。国等々の予算削減政策もいい加減にしてほしいと思うところだ。

そういう筆者自身の周りも、右を見ても左を見ても問題だらけであり、相当ウンザリと言ったところなのだが、幸か不幸か？場数の経験が染みついてしまっていて「やめた！」と言いつつも手足の方が勝手に動いてしまうことが少なくなく、「頭がやめても体がやめない」という状況が意に反して？続いてしまっている。救命講習の受講とて、それだけでなく忙しいというのに、手の方が勝手に申込書を書いて出してしまうのだから、自分でも

呆れて笑ってしまうしかない。「人が夢をうらぎる」などという言葉を目にしてしまうと「人間、あきらめたらそれで終わり」というフレーズがどこからか湧いてきてしまう。そして、ふと、周りを見回せば、余命5年と言われた人が10年近くも元気で過ごしていたりして、絶対に無理なことが無理でなくなっていたりもする。そんな状況下で「努力はけっして人をうらぎらない」などというフレーズを耳にしてしまうと、体の方は益々その気になってしまう…。

こうした状況が本当に幸なのか？不幸なのか？はよく分からないのだが、一つ言えることは、小さな成功体験が積み重なってくると、体の方が夢を破らないように勝手に動き出してくるということがあるということなのだ。かなりの困難に直面しても、過去に良かったことだけが次々と思い出されるから不思議というものだ。もちろん、過去の経験が全て活きるわけでもなく、よい結果に繋がるわけではないのだが、過去の成功の積み重ねというものは「根拠のない自信」となって自分を支えてくれるから不思議というものだ。小さな成功というものを侮らない方がよい。

